

小川原湖沼群のハクチョウ類

昭和47年～52年の観察記録

田高昭二 畑山利明
津曲隆信 三沢高校生物部

I はしがき

小川原湖沼群には古来、ガンカモ科の水鳥の渡来が多いといわれているが、長期的観察にもとづいた報告が少なく、単に本県の湖沼に生息するから小川原湖にもいるだろうとか、時折の観察におもむいて断片的に報告する例が多かったように思われる。したがって、本県は勿論、本邦で出版される鳥類関係誌で小川原湖沼群の水鳥の紹介は殆んど認められず、しかも極めて記録性に乏しい。

近年、この地域は巨大開発の中心地域として注目されつつあり、早晚工業地帯に変貌するものと思われるので、自然保護の立場からの調査が急務とされるであろう。

筆者等は、このような現状認識の上で、鳥類調査を昭和46年からおこなってきた。ここに報告するのは昭和47年から52年春までの観察結果のうちとくにオオハクチョウとコハクチョウの生態に関するものであり、それについて二、三述べてみたい。

尚、この地域における野鳥の日録も未だ不十分な点があるが付記する。

この調査にあたって、三沢自然に親しむ会の工藤英明、工藤恭三(現浪岡高)、遠藤一彦(現三本木高)増田俊一(現青南高)、特の御指導と御助力を頂いたことを深く感謝する。

II 調査方法

現地調査期間は、昭和47年11月15日から昭和48年3月20日までのうち、31日間をあてた。対象湖沼は、尾駸沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、小川原湖、姉沼の6湖沼であるが、風雪や調査時間等の関係で毎回6湖沼を巡回できなかった。巡回には自動車を利用したが、期間中6日間は現地にテントを張って氷状とハクチョウの動静を観察した。

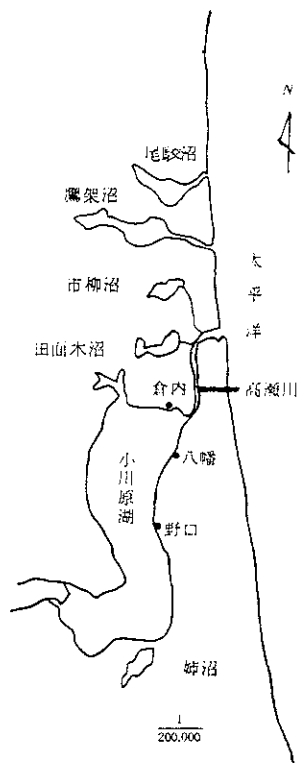
III 調査結果

1. 水鳥の種類と生息数

ガンカモ科18種、ワシタカ科11種、その他18種、合計47種を確認した。この中で、ガンカモ科の種類が多いので次にその種名を記す。オオハクチョウ、コハクチョウ、マガン、マガモ、オシドリ、カルガモ、コガモ、オナガガモ、ホオシロガモ、スズガモ、キンクロハジロ、ヨシガモ、コウリガモ、ヒドリガモ、ホシハジロ、ピロウドキンクロ、ウミアイサ、カワアイサ。

この中で、調体数の多いのは、オオハクチョウ、マガモ、ホウシロ

図一 小川原湖沼群図



ガモ、スズガモ、キンクロハジロ、ヒドリガモ、ヨシガモなどである。オオハクチョウは最高羽数が970羽であった。また1月10日には尾駁沼で450羽が4群にわかれて遊泳採餌しているのを観察した。

1月27日は小川原湖の腰下沖合約1,000mの水域にマガモ700羽、ホオジロガモ200羽、スズガモ200羽の大群がオオハクチョウ180羽と行動していた。図-2はガンカモ科の観察記録をあらわしたものである。観察期間中常に確認できたのはオオハクチョウのみで、コハクチョウは1月8日から2月19日までは確認されたがそれ以後は湖沼群内に姿をみせなかった。コハクチョウの数は観察日によって多少の変化が見られたが47羽の集団で、小川原湖東北部の倉内から八幡間湖岸の浅瀬にオオハクチョウと混合して、一見同集団のように思われるが別群をなしている。そして、観察期間中常にこの限定された水域にとどまり、他のオオハクチョウのように湖沼群内を移動することはなかった。

マガモ、ホウシロガモ、スズガモ等は、腰下沖1,000m水域で1,000羽位の群で遊泳しているのを数回観察した。これらの観察は晴天にめぐまれないと不可能であるが、この湖沼に渡来するカモ類の相当数が昼間の難をさけてこの水域に集っているものと推定される。また、尾駁沼にも上記の種が500羽位の集団で常に認められるので本湖沼群では最も一般的で羽数の多い種と思われる。

次に羽数の少ない種はコウリガモ、ヒドリガモ、ウミアイサ、カワアイサであるが、出現頻度は極めて高い。コウリガモ、ヒドリガモはオオハクチョウと行動を共にするが、ホウシロガモ、スズガモ、マガモ等の群に混入することが多く、この種の群が単独で行動していることは稀である。

カワアイサは姉沼で多く観察された。本県では余り多くないとの報告があるが、本湖沼群ではよく見かけられたので、個体数が多いものと推定される。

カルガモ、オシドリ、マガンは2月下旬以降湖沼群が全面解氷後に数羽単位の少数観察された。

図-2 観察記録

種名	11月		12月		1月							2月					3月							
	15	25	4	23	6	8	9	10	13	17	19	27	28	31	7	9	10	11	14	19	10	18	20	
マガン																								
オオハクチョウ																								
コハクチョウ																								
マガモ																								
カルガモ																								
オシドリ																								
コガモ																								
オナガガモ																								
ホオジロガモ																								
スズガモ																								
キンクロハジロ																								
ヨシガモ																								
コウリガモ																								
ヒドリガモ																								
ホシハジロ																								
ビロウドキンクロ																								
ミコアイサ																								
ウミアイサ																								
カワアイサ																								

ピロウドキンクロは今冬はじめて確認した。

1月19日野口湖岸で油にまみれて死んでいるのを(8)発見した。

2. ハクチョウの個体数の変化

小川原湖沼群に渡来するハクチョウは、筆者の観察では11月15日が最初であった。1月初旬には300羽以上になり、2月上旬に250羽と急激に減少している。2月10日以降3月中旬までは増加の傾向を示し、最高時には湖沼群総数で900羽に達した。図-3は湖沼群における個体数を示したものである。湖沼別にみれば図-4の通りで、湖沼中尾鷺沼は1月上旬まで多く、続いて小川原湖、鷹架沼の順である。2月上旬以降は鷹架沼が全面結氷したためと、尾鷺沼も湖岸から100mほど結氷したので採餌不能となって小川原湖に移動したため姿が認められなかった。したがって、小湖沼群が結氷すると、それまで分散していたのが小川原湖に集合するので、今冬は2月10日から3月

図-3 小川原湖沼群のオオハクチョウ、コハクチョウの個体数の変化

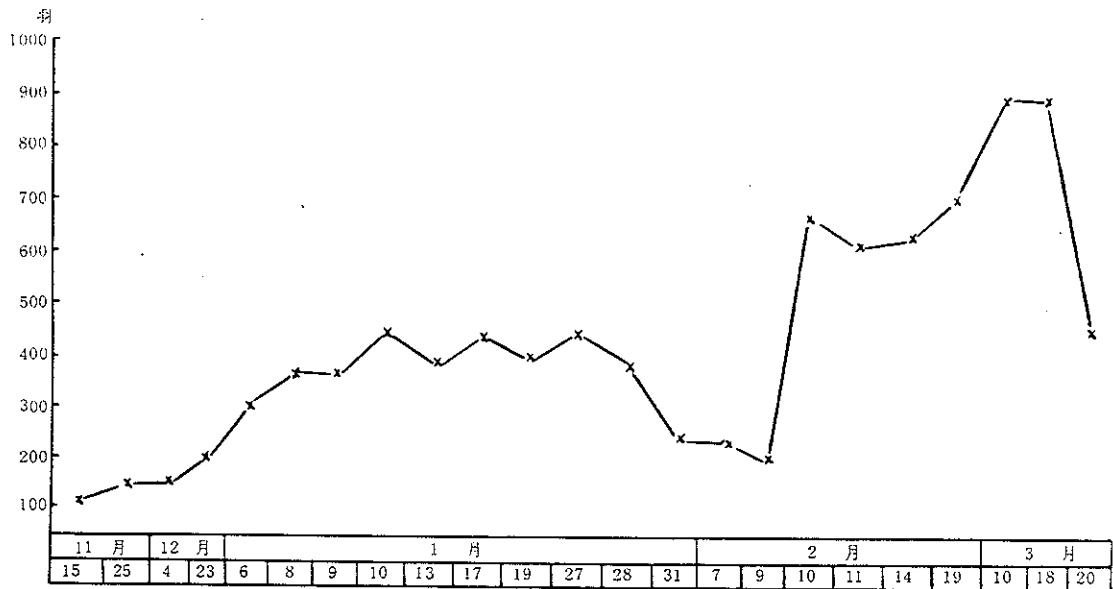
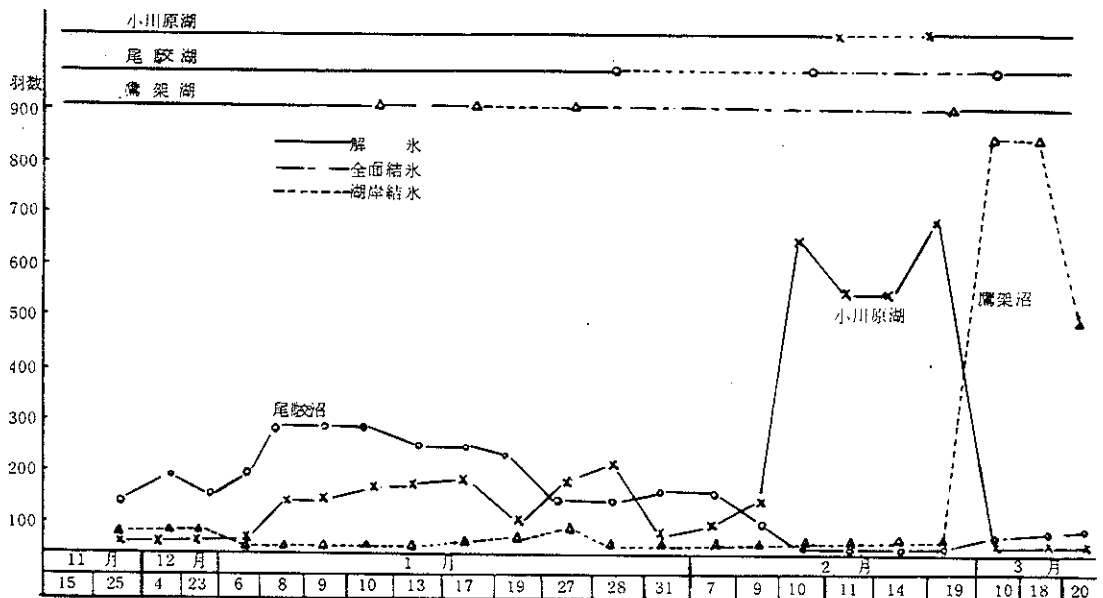


図-4 三湖沼におけるオオハクチョウ個体数の変化と結氷

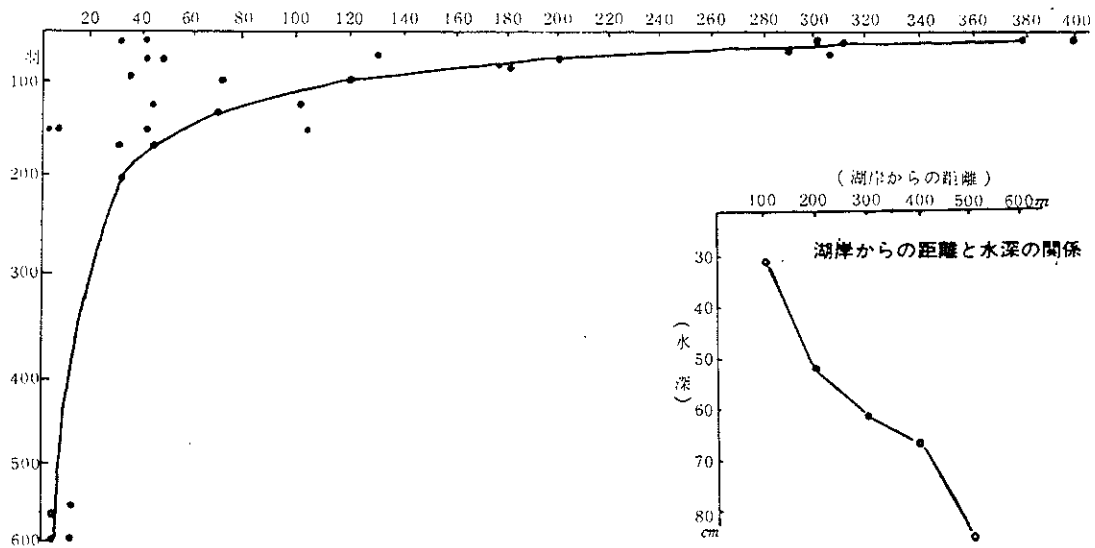


18日の間は550羽以上になり、最高羽数700羽に達した。3月10日以降は解氷とともに小川原湖の集団の大半が鷹架沼へ移動した。そして、二時期の特徴的なのは、湖沼群の全体に分散し、ヨシ、マコモ群落の発達している水域に群生することである。3月10日の記録では、姉沼に60羽、市柳沼に70羽、小川原湖の七戸川11羽、尾駮沼35羽、鷹架沼に850羽と分散しいずれもマコモ群落の根茎を摂食した。小川原湖は期間中全面結氷はなく、主群集は八幡から倉内間の水深1m以内の水域で採餌していることが多かった。

3. 氷状の発達によるハクチョウの動向

小川原湖で最もハクチョウの多い水域である八幡海岸で氷状の発達がハクチョウの分布にあたる影響について調査した。その結果は図-5の通りである。湖岸から沖合に向かって氷が発達していくのは、浅い湖岸ほど水温低下が早いからで、この水域は小川原湖中で遠浅面積の最も広いところなので湖岸から400m沖合いへ出ても水深60cm以内である。したがってハクチョウは沖合100m~400mまで氷が張り出しても採餌可能である。他水域ではこのような遠浅のところは湖南部の川口付近にいくつかあるが、何れも底質が軟泥で植物の繁茂が認められないから採餌場として不適当なために結氷と同時にこの水域に集まるのであろう。しかし、結氷が更に沖合に発達し、400mを越えると全く姿を消すが、その一部は周辺の結氷しない池沼に分散しているようである。

図-5 氷幅と個体数及び水深



4. ハクチョウの食性と二、三の考察

小川原湖沼群に渡来するハクチョウは、オオハクチョウ、コハクチョウ合わせて900羽位である。戦前の数は今日をしのぐものであったとも言われているが、確かな資料はない。戦後に至って小川原湖周辺の人々が捕獲し食用としたり、米軍人がモーターボートに乗って追回して射殺するなどがあり一時は殆んど姿を見せなかったが、昭和40年頃から自然保護思想の普及等でそのような不祥事も少なくなったため次第に増加し始めて今日に至っている。

渡来の第一群は尾駮沼にとどまり、別の一群であるコハクチョウが小川原湖の高瀬川沖合いに同じ

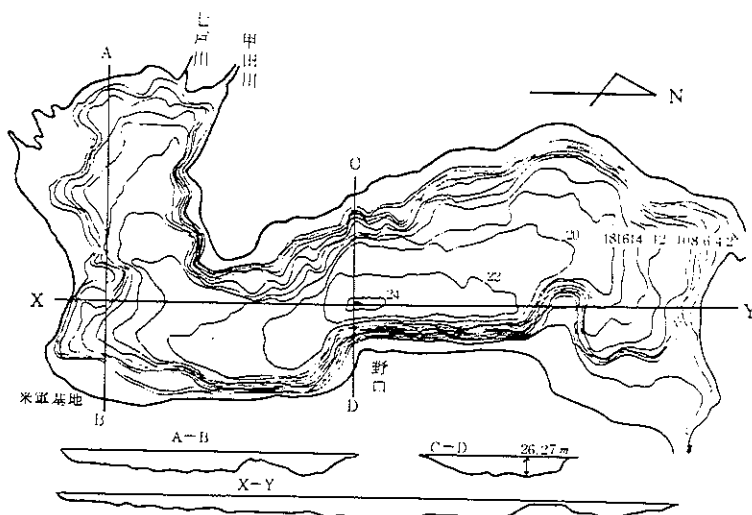
頃にあられるようである。そして、12月下旬に小川原湖、尾駸沼ともに急激に増加し、付近の湖沼にも分散するが、一月中旬以降は小湖ほど結氷が早いので、結氷の遅い小川原湖と尾駸へ移動する。

しかし、小川原湖沼群の結氷開始は12月下旬から1月下旬までの幅があるので、12月下旬から早くも姿を消すこともあり様ではない。小川原湖でオオハクチョウ、コハクチョウの多く集まる水域は湖東部の高瀬川口から野口へかけての浅瀬の付近であるが、筆者等の小川原湖研究グループの水生物調査(1969)によると、この水域は、栄養塩類が少なく、ジャシクモ、カタジャシクモ、クロモ、セキシウモ、ホザキノフサモなどが生育しているが、これらの群落密度は極めて低く、他水域に比較すれば植物生産量が $\frac{1}{3}$ 以下である。このような環境なので、採餌の条件としては決して適当とは考えられない。したがって、この水域に集まる理由としては、採餌そのものではなく次のことが原因となっているものと推定される。この水域は高瀬川を通じて満潮の際海水の流れがあり、干潮の時は逆に湖水が太平洋に流出するので潮流が強い。しかも海水が混入するので塩分濃度が他の水域より高いために結氷が遅いか、年によっては結氷しないこともあるので水鳥としての生息の場が確保されることと、図-6でわかるように1m以内の水深域が広範囲に渡っているので、餌としての水生植物が貧弱であっても、適性規模の個体数を維持しながらこの水域に安全を求めてとどまるものと思われる。したがって周囲が結氷している間は十分な採餌ができないため、3月の解氷がはじまると一斉に各湖沼へ分散し、渡来当初に余りみられなかったヨシ、マコモの根茎まで摂食することによって栄養補給をするのであろう。

また、観察期間中の1月28日に、小川原湖倉内水域にいた150羽のうち約100羽が日没近くになると5~7羽の群に分かれて飛びたち、小川原湖の南方へ向って、それぞればらばらに去っていったことがあった。その時は、夕日をあびて、おびただしいオオハクチョウが上空を通過していく姿を眺め、おそらく伊豆沼へでも南下しているのであろうか、などと考えながら長旅の無事を祈って帰路についたのであった。ところ

が翌朝学校への通勤途中で、昨夕飛び去った方向から4群のハクチョウが小川原湖方向に上空を鳴きながら通過していくのが認められたのであった。そこで早速、筆者が指導している三沢高校の生物部の生徒や列車通学生などに、今朝通学途中でハクチョウの姿を見なかったかどうかを尋ねたら、三沢市で見たものや下田町で見たことなどが判った。そして、飛んでいく方向が何れも小川原湖方向で、しかも筆者の見た群とことなる別の5群が判明したのである。そんなことから、昨夕倉内水域から飛び去ったのが舞いもどってきた可能性が強いと思われたので、昨日の場所へ同じ時刻頃について数の確認をしたら、165羽であった。したがって、もどってきたのはほぼ間違いのない様であった。しかし、その日の日没に飛び去ったのは13羽の2群だけで、他は北西風下に一直線の列をつくって氷上

図-6 小川原湖の深度と断面図



で夜を迎えたのである。その後、2月11日の観察でも同様な行動が認められた。この観察結果を機会があって「朝帰りのハクチョウ」と称して新聞の話題にしたら、ハンターの方達から八戸方面や下田方面の凍結しない池沼にカモと一緒にきているのをよく見るとの情報が何人からも寄せられたのであった。したがって、小川原湖沼群の結氷が進行しても残留するオオハクチョウは採餌のために小川原以外の小池沼にまで行動範囲を拡大しないと十分な栄養をとれないと思われるが、個体の識別をした調査結果でもないので推定の域を出ない。今後詳細な観察によって明らかにしたい。

IV ま と め

この調査で、冬鳥または冬期間もこの地域に生息する留鳥等も含めて47種を確認した。水鳥として、量的に多い種は、オオハクチョウ、マガモ、ホウシロガモ、スズガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、ヨシガモなどである。

オオハクチョウ、コハクチョウの個体数は600羽から900羽位で、11月の渡来当初は各湖沼に分散しているが、結氷の早い、小湖沼から順に小川原湖や尾駁沼へ移動し、1月中旬から2月上旬にかけては結氷の遅い高瀬川口付近と八幡沖へかけての水域に集まる。3月の解氷後は、また各湖沼に分散するが、食性が変わり、ヨシ、マモの根茎を食することが多い。

湖沼群における個体数の変動は冬期の氷状と密接な関係があり、その中で採餌を軸とした移動が湖沼群の中と周辺の小池沼でおこなわれている。

参考文献

小川原湖の湖沼学的研究

三沢高校小川原湖沼研究グループ

1968

陸奥の渡鳥(上下)

和田千蔵 1926

鳥類の研究(生態)

黒田長久 1967

青森県の鳥類

青森県 1972

小川原湖沼群周辺の野鳥目録

筆者が三沢高校に勤務して以来小川原湖沼群周辺の森林、草原、湿原などに生息を確認している鳥類の種は 125 種であるが、次にその目録を記述する。

科名	種名
カラス	ハシブトガラス、ハシボソガラス、カケス、オナガ
アトリ	アトリ、ホオジロ、イカル、カワラヒワ、マヒワ、アオジ、イスカ、ナキイスカ、カシラダカ、シメ、ウン、ベニヒワ、クロジ
キンバラ	スズメ、ニューナイスズメ
ムクドリ	ムクドリ、コムクドリ
ヒバリ	ヒバリ
セキレイ	ハクセキレイ、キセキレイ
シジュウカラ	ヤマガラ、シジュウカラ、ヒガラ、コガラ、エナガ
モズ	モズ、チゴモズ
ウグイス	ウグイス、コヨシキリ、オオヨシキリ、メボソ、セッカ
メジロ	メジロ
ヒタキ	オオルリ、サンコウチョウ、キビタキ、ヒヨドリ、クイタダキ、ショウビタキ、コサメビタキ
ツグミ	アカハラ、クロツグミ、トラツグミ、ノゴマ、マミジロ
ミソサザイ	ミソサザイ
ツバメ	ツバメ、イワツバメ
ヨタカ	ヨタカ
カワセミ	カワセミ、アカショウビン、ヤマセミ
キツツキ	アカゲラ、アオゲラ
ホトトギス	カッコウ、ホトトギス、ツツドリ、ジュウイチ
フクロウ	フクロウ、オオコノハズク、コミミズク、トラフズク、アオバズク
ワシタカ	ハヤブサ、ノスリ、トビ、ハイタカ、クマタカ、ツミ、チョウゲンボウ、チュウヒ、ハイイロチュウヒ、ミサゴ、オジロワシ、オオワシ
キシ	ウズラ、キシ、ヤマドリ
チドリ	シロチドリ
シギ	ヤマシギ、タシギ、イソシギ、オオシギ
サギ	アオサギ、シラサギ、ゴイサギ、チュウダイサギ、サンカノゴイ
ガンカモ	マガン、ヒシクイ、マガモ、カルガモ、オシドリ、コガモ、オナガガモ、ホホシロガモ、ヒドリガモ、スズガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、ウミアイサ、ミコアイサ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヨシガモ、コウリガモ、ビロードキンクロ
ウミウ	ウミウ、カワウ
カイツブリ	カイツブリ、アビ、カンムリカイツブリ
ハト	キシバト、アオバト
クイナ	バン、オオバン、クイナ
カモメ	カモメ、セグロカモメ、トウゾクカモメ、コアシサシ

この中で、この地域に希な種及び特徴的なものを紹介する。

ナキスカ：イスカの群に混って、冬期湖岸の松林で時折りみかけるが、極めて稀である。

アカショウビン：根井沼や小田内沼の水面すれすれに飛んでいるのをみることがあるが、カワセミのほど数は多くない。ヤマセミも尾身沼周辺の森林で捕獲された標本を確認しているが、ついぞ筆者の眼では未だにみていない。少ないものの中に入れてよいであろう。

アオバズク：この種は夏鳥であるが、この地域での羽数は極めて少ない。昭和47年の夏に湖岸の路上で自動車に衝突して死んだ一羽をみただけである。それに反して、オオコノハズクは冬期に入って厳寒期の2月頃に三沢近郊の農家の近くへよくあらわれ、雪上で死んでいるのをよくみかけるし、夜間の鳴声などから推して、その個体数は多いものと思われる。

ワシタカ科ではハイイロチュウヒ、クマタカ、ミサゴ、オジロワシ、オオワシ等は極めてまれで、ハイイロチュウヒは一羽六ヶ所で採捕された標本をみただけである。また、クマタカは小川原湖岸の野口付近で昭和46年に一回確認したがやはり数少ないと思われる。しかし、この時のクマタカは八甲田山方面から移動していたものと考えた方が極く自然のようである。ミサゴは田面木沼でよくみかけるが他の湖沼では全く姿を見ない。空中の一点からスカイダイビングして水面に突込む様は見事の一語につきる。オジロワシは12月の中旬以降3月下旬まで、ハクチョウやカモ類を追いながら氷上や湖岸の樹上で体を休めているのをみるがその数は少ない。昭和48年3月に鷹架沼でオオワシ一羽とオジロワシ4羽が氷上で休んでいるのをみたが、湖沼群全体でも10羽以下の個体数であろう。昭和の初年の頃まではオオワシを含めて相当数の渡来越冬するものがあつたときいているが、開発等で姿を消すのは時間の問題だけに誠に残念なことである。探飼行動での知見として、筆者が観察した限りでは、氷の割目に長時間待期して30cm以上もある魚(ウグイのようであつた)を水中から片足ですくい上げて一旦氷上に置き、ばたばたするのをこんどは両足で押えこんで飛び立ち、湖岸の人影のないアシ原に持ちこんで食べていたことやオオハクチョウの大群から100m位離れて監視していたオジロワシが突如襲い、一番遅く飛び立ったものへ足でとびかかって殺し、そのまま放置して飛び去ってしまったことがあつた。筆者らを警戒しての行動のようであつたので、木影にかくれて、舞戻ってくるのを3時間も待ったが、ついにあらわれないうま日くれたのであつた。翌日、必らずくるものと判断したので早朝から張りこんでいたが期待はずれに終つた。然し、オジロワシに代つて、カラス、トビが10数羽群がって肉をちぎり始め、昼頃までには遠くからでもはっきりと骨がむき出しになっていくのが見え、夕方までにほぼ骨片と胸部辺の肉が幾分残る程度までになつてしまつたのであさらめて帰りかけたら、その瞬間、湖崖の高木からさつと飛びだしたと思つたら一直線に降り立ち、肉をちぎり始めた。その時は、すでに西の八甲田山に夕日が落ち、辺りがうす暗くなつていた。おそらく、朝から湖崖の樹上で、筆者等を発見してしたのであろう。この2態からだけでオジロワシの食性等について述べるのは問題があるが、湖の魚とガンカモ科の群の中で一日の大部分をついやしている事実から、小川原湖沼群にいる冬期間は湖の魚類とハクチョウ、カモ類が摂食の対象となつているものようである。

カムリカイツブリ：カイツブリや、アビは本湖沼群では普通に認められるが、この種は田面木沼と市柳沼に限定され、夏期には営巣して子を育てる。本州では初の記録で、警戒心が非常に強く、他の湖沼への移動は見られない。冬期両湖沼が結氷する間は姿を消すが、おそらく東北南部かそれ以南に移動するのであろう。個体数は10数羽である。

コアジサシ：この種は姉沼で数羽みるが、その数は年々減少しているようである。本県では野内川などで発見されているが、現在は姿を消しつつある貴重な種のようなのである。

昭和 51 年の観察記録

11 月 14 日 (雨)

尾 駁 沼	オオハクチョウ	27羽(幼鳥 10羽)	ホオジロガモ, スズガモ, オナガガモ
小川原湖	オオハクチョウ	150羽	
	コハクチョウ	数羽	

11 月 20 日

尾 駁 沼			スズガモ
小川原湖	オオハクチョウ	159羽(幼鳥 34羽)	スズガモ, マガモ, キンクロハジロ

12 月 12 日

尾 駁 沼	オオハクチョウ	62羽(幼鳥 15羽)	ホオジロガモ
小川原湖	オオハクチョウ	89羽(幼鳥 18羽)	マガモ, ヒドリガモ

12 月 28 日

尾 駁 沼	オオハクチョウ	197羽(幼鳥 33羽)	ホオジロガモ
小川原湖	オオハクチョウ	206羽(幼鳥 24羽)	ヒドリガモ, スズガモ

1 月 4 日

尾 駁 沼			
小川原湖	オオハクチョウ	270羽(幼鳥 57羽)	スズガモ, ホオジロガモ

1 月 11 日

尾 駁 沼	オオハクチョウ	1羽	スズガモ, ホオジロガモ
小川原湖	オオハクチョウ	574羽(幼鳥 82羽)	

1 月 16 日

尾 駁 沼			
小川原湖	オオハクチョウ	252羽(幼鳥数えきれず)	

2 月 6 日

尾 駁 沼	オオハクチョウ	75羽(幼鳥 17羽)	
小川原湖	オオハクチョウ	133羽(幼鳥 11羽)	

2 月 20 日

小川原湖	オオハクチョウ	110羽(幼鳥 7羽)	
高 瀬 川	オオハクチョウ	3羽	小川原湖より移動してきたもの
尾 駁 沼	オオハクチョウ	74羽(幼鳥 3羽)	
七戸川下流	ハクチョウ	20羽前後(幼鳥らしきもの 1羽)	